SHOFCO役員
マット・チャノフ

キベラ・ガールズ・スクールは、アフリカで最も大規模で貧しいスラム街のひとつにある小学校です。子供たちは、キベラの狭い路地を流れる汚水を避けながら歩きまわっています。何十万人もの人々が長い路地に住んでおり、10フィート四方（約３㎡）に細かく区分けされた部屋に６～１０人もしくはそれ以上が、長い金属トタン製の小屋に住んでいます。そのため、水、衛生設備、電気、医療、仕事などは行き届きません。

ケネディ・オデデ氏をはじめとする地元コミュニティーのメンバーによって設立されたSHOFCOという組織は、キベラ・ガールズ・スクールを幼稚園からスタートし、毎年新しいクラスを増やしていきました。それから8年後、最初の女子生徒たちが卒業し、ケニアの公立高校のシステムに加わる準備が整ったとき、私は卒業後も少女たちを支援し続ける方法を検討するチームの一員となることができたのです。私は杉原さんの話と叔母のシルビアのコンテストを思い出し、これをケニアに持ってくることを提案したのです。私たちは、このコンテストを私たちの学校の卒業生だけでなく、ケニアの厳しい高校入試に合格し、SHOFCOの支援で入学することができたキベラの他の生徒たちにもこのコンテストへの参加を募集しました。その後数年間は、ブルンジで同様のプログラムを実施しました。ブルンジは、世界でも2、3本の指に入る最貧国で、学生エッセイストたちの記憶は、戦争と民族紛争に苦しめられてきました。
このコンテストでは、生徒たちに、自分自身が直面した、あるいは知り合いが直面した倫理的ジレンマについて書くよう求めています。時には、特にブルンジの学生にとっては、彼らが書いたジレンマが、真のヒロイズムを必要とする実際の生死をかけた状況であることもあります。もっと多いのは友人のために立ち上がること、薬物中毒と闘うこと、家族を助けるために個人的な機会を犠牲にすること、などです。入賞したエッセイは、どれだけ悲惨な状況であったかではなく、生徒がいかに思慮深く、倫理的な問題を考え、明確にし、そして困難な状況にもかかわらず、対象者が正しいことをしたということをいかに効果的に主張したかが評価されます。

しかし、ある記念すべき年、総合優勝者は真のヒーローについて書きました。彼は、10年前の民族紛争の時代のある出来事について書いたのです。違う種族の隣人が、地下室に少年と彼の家族を隠したという命がけの行為です。その年の表彰は、一世代前に自身がルワンダで民族紛争によって救われたルワンダ出身の教師と審査員によって贈られました。その教師は挨拶の中で、一世代前にシルヴィアや彼女のような何千も

の人々を救った、民族も違う別の人間である杉原さんについて語りました

倫理的ジレンマはヒーローだけのものではありません。しかしそのブルンジの隣人や、ルワンダで私たちの審査員を救った無名の人々、あるいは杉原千畝さんのようなヒーローは、私たちすべてに考えるべきこと、目指すべきものを与えてくれるのです。

マット・チャノフ